

の十二、而して之がために地位、名譽、財産、肉體等地上の物を失ふも亦已むを得ざるなり、キリストは曰へり。

窄き門より入れよ……命に至る路は窄くその門は小さし(馬太傳七の十三、十四)

その生命を保全うせんと欲する者は之を喪ひ我がために生命を喪ふ者は之を保全うすべし、人もし全世界を利することも自己を喪ひ自ら亡びなば何の益あらんや(路加傳九の二四、二五)  
と、パウロも云へり。

われ主キリストイエスを識るを以て最も益される事とするが故に……之等の凡てを損せしかど之を糞土の如く意へり(腓立比書三の八)

と、此意味に於ては肉體の死も亦其慈悲を有すと云ふべし、死や恐

怖の王として最も人の恐るゝ處なりと雖も、死のみが肉體を除き得て神聖なる交通に入らしむるとせば、死も亦其恩惠の半面を有すなり。

眞理は何處に在る乎 (Where lies the Truth?)

眞理は何處に在るか?

人間はまことに憐れなる運命を持つか、

休息は短くして、益々

勞苦悲愁は増すにあらずや。

彼れ背恩者にして

神恩を輕んじ忘るゝか。

花は躍り、

雲雀は急ぎ巢を出で、

旭日に歡聲をあぐるなるに、

人のみは勞苦に生れ悲哀に住むべきか？

天地に聞ゆる歌を唱ひて

彼等は揚々として高處に昇るなり。

—— されど空しく歎く勿れ、

彼等上昇者の如くわれ等も昇らん、

我等は人生の悲痛艱苦を経て

より輝きより清き天を目指す。

註。人生艱苦多し、時に思ふ、人はこれ呪はれし生物に非ざるかと、

又時に思ふ、斯る懷疑は神恩を忘れしがために起りしなるかと、あ

の眞理は何處にあるか？と、疑團一度深く立ちこめては速かに晴べ

くもあらず、懊惱堪へ難し。然れども花は躍り雲雀は蒼空を目指し  
て飛ぶ、我等も亦之に倣ひて昇るべきなり、人には罪あり、然りと  
雖も亦靈あり、罪は我等を世に縛らんとする肉情の生む處なれど、  
靈は自由を渴望して高く天に翱翔せんとす、罪をして罪たらしめよ、  
艱苦をして艱苦たらしめよ、要はこれに終始せず、これに膠着せず、  
靈をして天の彼方白き大なる寶座（黙示録二十の十一）に向はしむ  
るにあり。

一 老人 (I know an aged Man constrained to dwell)

養老院に住む身となりし

一老人をわれは知り、

獄屋にある罪人のごとく

近くに人は多けれど伴侶はなし。

かれ乏しくて施物に頼る身なりしも、

小舎より踰越き出でし時は、

一羽の駒鳥に食を願てり、

駒鳥は小道にて之を食へり。

(小舎へは來得ざりしなり)

廢殘の労働者は

樹の根に腰うちかけ、

膝の上や地に散らせしパン切を

駒鳥は一つ又一つ啄めり。

日に彼等の交誼は密なりき、  
逢ひし時の歡喜の表顯よ！  
思へ、共通の平和、無邪氣の嬉戲、  
別るゝ瞬間、後の哀傷！

一は翼をはいたゞき嘴を動かし

一はふるへる手もて愛撫し、

季節は變れども變らざる愛に

日は過ぎ月は逝けり。

かくて此恰好の場所に於て

堅き愛着は孤獨者の間に生じぬ、  
されば後、老人、衆と共に住みし時  
人との對話を避けたりき。

妻、子、親戚は皆さきに逝きぬ、  
されどもし不運が彼を妨げずば、  
一の生ける支柱は残されて(譯者註、  
支柱とは駒鳥を指す)  
失ひし總量を償ひしなりき。

おゝかの善良なる老人が  
不可思議の報知に導かれて  
「彼は尙ほ鳥を愛するなり、愛すべきなり、

註。 共在は破るゝも交友は續くなりと悟らんことを願ふ。  
我等は愛さずしては生くる能はず、愛されずしては生くる能はず、  
愛は靈的生命の保存のために必要なり、其發育のために必要なり、  
バツロ曰く、

汝等目を醒し、堅く信仰に立ちて、丈夫の如く剛かれ、汝等の行  
ふ處皆愛を以て行ふべし(哥林多前書十六の十三、十四)。

と、覺醒は必要なり、信仰確立は必要なり、丈夫的行動亦缺くべからず、  
而して愛的行爲は常に行はれざるべからざる處、我の愛を受くる人なくば、  
我は禽獸蟲魚に愛を注ぐべく、愛物との共在破るゝも尙愛を注ぐべきなり、  
而して全き孤獨に陥るも、我を愛し我の愛する人以上の人あるを忘るべからざるなり、  
バツロ又曰く、  
キリストは我等のなほ罪人たる時われらのために死に給へり、神

は之によりて其の愛を彰し給ふ(羅馬書五の八)。  
と、此の所信、孤獨の中に我等を救はん。

夜の女王 (How beautiful the Queen of Night)

天上雲を衝いてすゝむ  
夜の女王(月)の美しさよ、  
折々暗雲のかげに  
かくれて姿を没す。  
されど瞻よ、心して瞻よ、  
雲の縁の光輝こそ  
やがて月の雲を破りて  
再び晴空を歩む前兆ならずや。

註。月が雲に入りしとて月なしと想ふ勿れ、雲端の光輝こそ再出現の豫兆ならずや、仰げよ明光は天に在り、願みよ光明は汝が生涯にあり、一時の陰雲を以て天空の全般を定むる勿れ、一時の患難を以て生涯の全部と見る勿れ、暗夜も曙紅の驅逐する所となるべく、嚴冬も陽春の前に失せん、パウロは曰へり、  
神は信なる者なり、汝等を耐忍ぶ能はざる誘惑に遇はせじ(哥林多前書十の十三)。  
と、ヤコブは曰へり、  
もし汝等様々の試誘に遇はば之を喜ぶべきことゝすべし(雅各書一の二)。  
と我等月の出沒によりて此秘義を學ぶべきなり、暗黒も亦光明の反證とならん。

夜の流れ (The unremitting Voice of nightly Streams)

夜の流れの絶間なき音が  
 草間にかややく虫  
 樹蔭に黙する鳥  
 死せる葉、眠れる花に快感を興へずば、  
 其潺々たる美曲は空に歸するかと思はる。  
 されど然らざるなり、  
 (外觀は真相にあらず  
 天には浪費なし)  
 此虚妄なき調和の曲は、  
 人々の胸に入りて睡眠と交はり

たのしき夢を結ばしむる  
 慰安力を有するなり。  
 これ太古萬民の  
 いさゝ小川の岸に感せし處、  
 今日もなほ  
 急流洶湧の畔に住む野人  
 漣波の奏曲を聞く農夫は、  
 感謝に充ちてこれを認む。  
 註。天には浪費なし、一葉の落つる、一莖の枯るゝ、全く無意味に  
 はあらざるなり、キリスト曰く、  
 二羽の雀は一錢にて售るに非ずや、然るに汝等の父の許なくば其  
 一羽も地に落つることあらし(馬太傳十の廿九)

と、夜の流れの潺緩たる音も空しく消えず、里人の眠りを安からしめ樂しき夢を結ばしむ、大なる人生の「慰安力」にあらずや。

書物！それは終なき勞苦のみ、  
來つて森の紅雀を聞け、  
其奏樂の美しさよ！まことに  
書物より多くの智慧此にあり。

聞けよ！鵲の歌の晴れやかさ！  
彼も亦貴き説教者なり、  
出で來つて萬物の光輝を見よ、  
天然をして汝の師たらしめよ。

彌生の森の一瞥こそ  
人に就き善と悪とにつきて

汝に教ふるこそ  
聖者の教の凡てに勝らん。

然り、天然に浪費なし、而して我等の勤勞にも亦浪費なし、神愛の下に勞働して一言一動の空に歸するはあらざるなり。  
造れよ、造れよ、物の最小片なりとも造れよ、神の名に於て造れよ、汝の有する處小なるも、全部をあげて出でよ、起て、起て、手の爲さんとする處は何事なりとも全力を以て爲せ、今日と呼ばるゝ中に働け、夜來らば誰人も働き得ざるなり（カーライル）。  
働けよ働けよ、而して凡ての結果を神に托せよ。

激流の畔に立ちて (On the Banks of a rocky Stream)

激流巖をうち且躍り且吼ゆ、

見よ、人の心に似たり、

百想湧けど動きて定まらず、

恰も此渦流の泡のごとく、

互に逐ひつ逐はれつ

めぐり又めぐれど

出口なく安止所なし。

——旅人よ、汝かゝる不安を抱かば

跪きて大能の助けを求めよ。

註。あゝ我等の心は渦の如く其想念は泡のごとく轉々動けども、同

一の場所に動くのみ、此中より脱却する能はず、此中にて安息する

能はず、まことに哀れなる捕囚の身なり、不安と妄動……實に醜き

は我心かな、唯大能の御手のみ能くこれを救ひ給ふ、キリスト我等

を慰めて曰ふ、

凡て勞れたる者また重きを負へる者は我に來れ、我れ汝等を息ま

せん……なんぢら心に平安を得べし(馬太傳十一の廿八、廿九)

と、我等暗中に泣く赤兒(テニソン)、唯母の援助を祈るの外無し。

光明耀々の夕 (An Evening of extraordinary Splendor and Beauty)

Splendor and Beauty

—

あゝ光明耀々の夕かな、

もし此光輝舞ふがごとくに

消え失せしならば、

われは無聲の雲間に



驚愕の眼を放ちしならん。  
 されどそは却々に消えずして  
 暮るゝ夕を聖化するなり、  
 かくて脆き人の子も  
 彼世の面影を偲び得ん。  
 往昔は天使の一隊  
 森に夕の讃歌を唱へ  
 野をも入江をも  
 妙なる聲にて包み、  
 又は星のごとく各々高處に居して  
 天のため地のために  
 絶好の曲を奏でたりとぞ聞く。

— 今かゝる天人の美曲の  
 山より響き來るとても、  
 此静謐、此輝光、  
 此陰影、此平和の夕に越えて  
 崇高き狂喜、潔き愛を與へじ。  
 二  
 間として音なし、  
 たゞ深く貴き調和の  
 空谷に充ち  
 林地をつらぬく。  
 輝々たる光明に浴しては  
 不思議の力にひかれて

遠き野山も近く見ゆ、  
 光輝は物に觸れて寶玉の光を與ふ。  
 世にも鮮かなる光明の中に  
 鹿は山側に並び立ちて  
 其角はきら／＼とひらめき、  
 羊群も亦かゝやきて見ゆ。  
 紫紅の夕よ、汝が時の静けきよ！  
 されど神聖なる希望の  
 我靈魂にさゝやきて已まぬ間は  
 此莊美を汝の所有物のみとは我は信せず。  
 |まことや此世ならぬ世界より  
 此恩賜の一部は來れるなり、

我牧羊者の踏む土地に  
 天よりの光明の來り交れるなり。  
 三  
 悲痛に泣く人よ、  
 患難に苦む友よ、  
 かなたの峯こそは  
 まこと「ヤコブの梯」は見えずや、  
 輝く大氣に包まれて天に登る彼の梯は  
 止まる處なく、  
 想像の翼を張つて登らしめ  
 不朽の靈と交らしむ、  
 |我肩上の翼ははた／＼と鳴る、

されど我は此處に止まり、立ちて  
 天に登る眞の道たる  
 彼の輝々たる階段を凝視す。  
 出で來れ汝首うなだるゝ老人よ、  
 目をあげて看よ、  
 汝の往くべき國の如何に美しきぞ！  
 又もし行路に勞れはて、亭後  
 芝地に眠れる旅人あらば、  
 汝精靈よ、彼が許に急ぎゆきて  
 いとく静かにゆり起し  
 此光明の夕の恩賜を受け得んやう  
 彼が靈を開發よ。

四  
 あゝ樂しかりし幼兒の時  
 我眼は何れに向ふとも、  
 天よりのかゝる光明は  
 常に眼前にたゞよひたりき。  
 此榮光の閃華、いかにして今再び看しぞ？  
 問はじく、たゞ感謝せん、  
 長じて後は此靈光の痕跡の  
 唯夢にて看られしなるを、  
 今面の當り看ることの有難さよ。  
 天然の威嚇と共に  
 平和静寂を伴ふ大能力よ！

われもし惡に染まり

われもし爾を離れんとする時は、

爾われをして此光明を思ひ起さしめよ、

此光明夙に我を去りて唯悲しかりしを

いま醒めたる眼にあらはれて

輝くぞ奇跡なる、

我靈なほ地にまみるれど

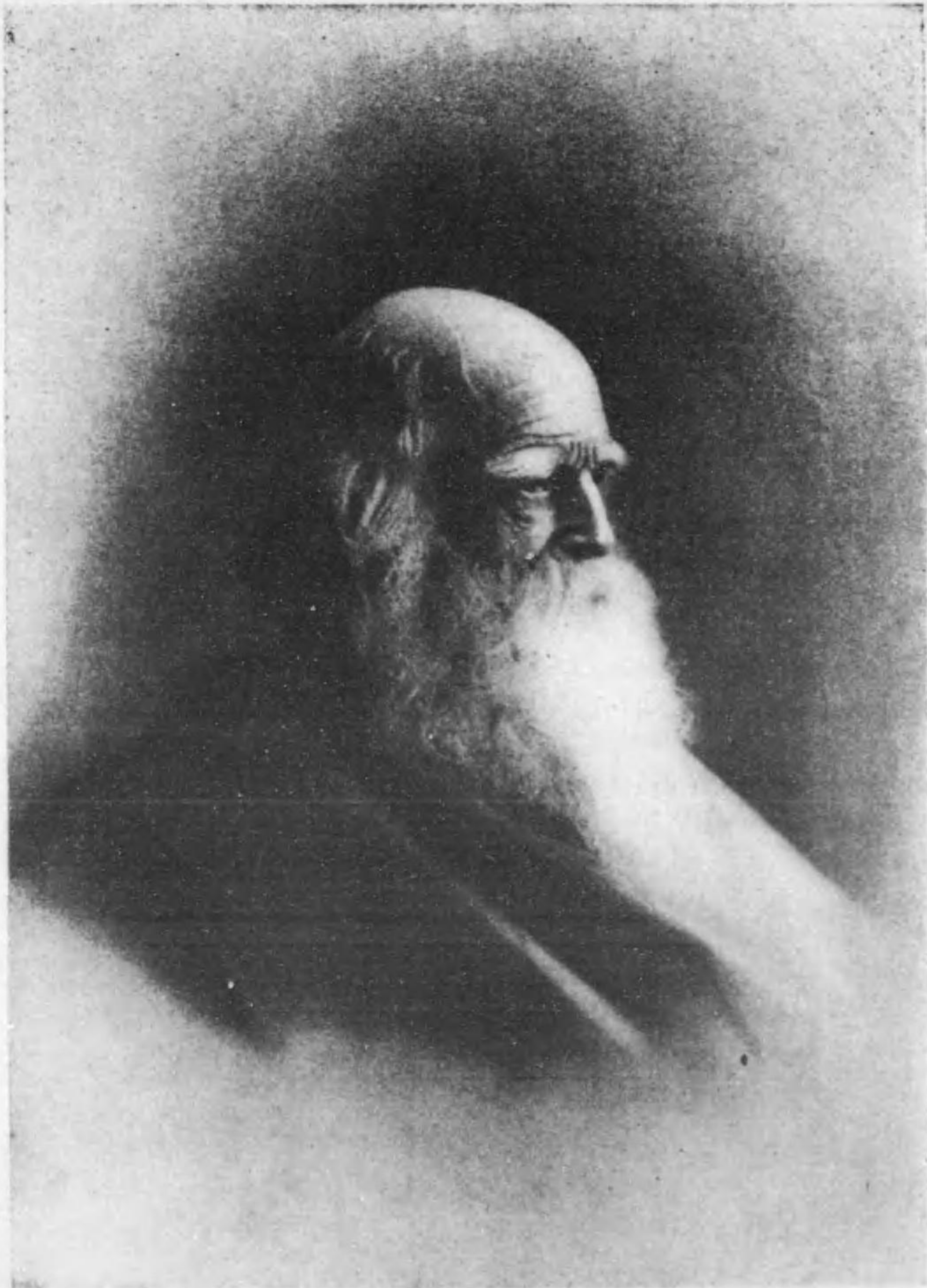
新生に狂喜すなり！

去りぬ、光輝は失せぬ

夜は陰を伴ひて近よる。

註。此はウナルヅラスが或光明の夕、天然の聖美にうたれて未來の郷國を仰望せし詩なり、第三及び第四が此詩の中心にして、彼は幼時及び老齡は天國に近きものとの感を抱き、幼時に失ひし來世の光輝の老齡に至て再び現はれしを感謝したるなり、「ヤコブの梯」は創世記二十八章にあり、其精神を採つて此詩に載せしなり。

耀々たる夕の輝き洵に繪に見るが如く、切々たる來世の希望は莊嚴雄大を極めたり、莊美なる哉此詩！偉大なる哉此詩人！



れ生に國米月一十年四十九百七千  
く逝てに國米月七年八十七百八千

詩人の二種

詩人に二種類ある、二種類に限る、第一種は創造的  
詩人であつて(シェークスピア、ホーマー、ダンテ)、第二  
種は反省的又は知覺的詩人である(ワラルツナス、キ  
ーツ、テニソン)、そして彼等の持場は違ふが、彼等は  
各その持場に於て第一流でなくてはならぬ、凡そ  
詩に於ては第二流のものを以て人を煩はしてはなら  
ぬ、第一流のものが充分ある、一生の間に讀み盡し  
味ひ盡せぬ程澤山ある、されば第二流以下の作を以  
て人を煩はすのは明白に悪事である、罪である。

(ラスキン著『近世畫家』より)

カレンブライアント

生涯

北米のウナルヅラスと呼ばる、カレン・ブライアント (William Cullen Bryant) は千七百九十四年十一月三日、マサチューセッツ州のカレントンに生れた。十八世紀の多事なる米國の精神的指導者なりし彼は、其共働者なるリンカン、ガリソン、ホヰットマン、ローエル、ホヰッチャ等の悉く十九世紀の初頭に生れたのに反して、獨り舊世紀の末葉に呱呱の聲をあげた、米國の精神界の开拓者の多くと等しく、彼は、千六百二十年にメーフラウア號に乗つて米國に渡航し自由の郷を未開の森林に建てた清教徒の子孫であつた。

THE CONQUEROR'S GRAVE

Nor thus were waged the mighty wars that gave  
The victory to her who fills this grave:  
Alone her task was wrought,  
Alone the battle fought;  
Through that long strife her constant hope was stayed  
On God alone, nor looked for other aid.

She met the host of Sorrow with a look  
That altered not beneath the from they wore,  
And soon the lowering brood were tamed, and took,  
Meekly, her gentle rule, and frowned no more.  
Her soft hand put aside the assaults of wrath,  
And calmly broke in twain  
The fiery shafts of pain,  
And rent the nets of passion from her path.  
By that victorious hand despair was slain.  
With love she vanquished hate and overcome  
Evil with good, in her Great Master's name.

父の家も母の家も强健と長命とを特色とするものであつた。父のピ  
 ーター・ブライアントは醫師であつたが、少年にして人生の辛慘を嘗  
 め獨學精勵して醫師となつた人、所謂立志傳中の人物であつた、嚴  
 格なるカルビン主義の家に育つた人であるが、もし自由な信仰を  
 持つて居たらしい、又詩に對する趣味深く大抵の有名な詩人の作は其  
 書齋を飾つたと云ふことである。母はあまり教養はなかつたが常識  
 の發達した人で、終日家事に勤めて厭はず、紡ぎ織り、小供の着物  
 を造り、又小供に「読み書き」をも教へた、「怠惰なる勿れ」といふ語を完  
 全に實現した人であつた。ブライアントが詩人としての詩想と操觚  
 者としての活動とを併せ思ふ時、吾等は其の因て來る源を想ふ。  
 ブライアントは幼にして詩作を好み、十三歳の時何か時勢に關する  
 詩を作つたのを、父がポストン市に持って行て印刷に附して世に發表

したことがある、此諷刺歌は大分賣行よく忽ち再版を出したといふ  
 ことである。  
 云ふまでもなく彼は宗教的家庭に生育したのであつて、母や祖母か  
 ら「主の祈禱」其他を教へられ、常に祈禱會などに連り、「神よ罪人なる  
 我を憐み給へ」といふ「税吏の祈禱(路加傳十八の十三)を度々爲した、又、  
 「不朽の詩を作るの天才を與へ給へ」と云ふ祈願を怠らなかつた。  
 十六歳の時、井ルヤムズ普通大學に入つたが、僅か七ヶ月にして退  
 いた、多くの思想界の偉人と等しく彼は學校生活をあまり好まな  
 かつた、此學校については次のやうな意味の詩を作つて居る。  
 科學が眞面目に坐して居る此貴い圓天井の家を何と詠はうか、  
 あゝ其恐しさと物淋しさは唯憐れな内住者(生徒)のみ知つて居る、  
 講堂を青い顔の學生が氣の脱けた顔で逼り廻る、まるで幽霊のや

ふだ、又は萎れて小さい室に潜り込む、此室といふのは暗く、汚く、湿つて、低く、陰暗と汚塵と蜘蛛巢の住處だ。

彼は家に歸つて獨修を始め、父の藏書を讀んで博物學や詩の知識を可成獲た、又時々詩作を爲したが、其詩にはウァルズス、サウゼー等の感化が認めらるゝといふことである、此頃作つた詩の中に「サナトプシス又は死觀」といふのがある、之は彼の傑作と呼ぶるゝ有名な詩である、二十歳未満の少年の作としてこれ程の名吟は恐らくは他に無いことであらう。

彼は少年の夢に襲はれて政治家の生涯を望み、先づ法律の獨修を始めた、それ故父は彼を或法律家の許へ送つて法律を學ばしめた、後此處を去つて更にブリッジャーターに住む下院議員にして法律家なるペーリー氏の許に研究を續けた、かくて千八百十五年には試験に

及第して辯護士の資格を與へられた、そして父の家に歸つた。

其後彼はグレートバーリントンにアイブスなる人と法律事務所を開いた、此町で彼は肺を病んだが辛うじて恢復し、熱心業に従事した、そして此頃から雑誌へ詩を寄贈することを始めた。

千八百二十一年彼は妻を娶つた、其二年前に父は世を去つた。彼は友人の勧誘に應じて舊作八篇を輯めた四十八頁の小詩集を出版した處、之は多少世の注意を牽き、英國に於ても其價値を認る人があつた、英國第一流の詩人コルリッヂの子ハートレー・コルリッヂ(論文家且詩人)は、此小詩集の中水鳥に與ふを激賞して、英詩中の最上の短詩と云ふた、併し詩人として盛名を博するは、前途尙遠慮である、雑誌の寄稿家としても、僅少の報酬を得るに過ぎなかつた。

ブライアントは辯護士として可成りに成功したが、文に天才のある



彼は永く法律事務の中に没頭することは出来なかつた、遂に千八百二十五年ニューヨーク市に移轉して筆の生涯を開始せんとした、天と自己の腕との外頼る處なき一青年は、抑へ難き自覺に動かされて今や天職の第一歩に入り、荆棘を伐て獨り己れの運命を開拓せんと思ふ、其前途は明か暗か。

彼は先づ雑誌記者になつたが、其雑誌は一向に榮えず、薄給に苦しむ境遇であつて、雑誌記者としての彼は未だ成功に至らなかつた、偶々ニューヨーク・イーヴニング・ポストといふ新聞の臨時記者に聘せられて、新聞記者の生涯に入るこゝとなつた、詩人をして安らかに詩作にのみ従はしむる程寛大ならぬ此世は、生活のために繁雜な仕事を課することを厭はぬ、我詩人も亦此世に生れては、新聞記者たるの招聘に此の方が詩作や雑誌事業より結構であると思つて應じな

くてはならなかつた、ミルトンの「失樂園」を僅か五磅で買つた此世は、裏に於て大なる凡ての人に對しては薄いものである、預言者を虐遇め救主を殺す此世のこゝとて敢て異しむに足らぬ。

千八百二十九年齡三十六にして、彼はイーヴニング・ポストの主筆となり、以後約半世紀の間此位置にあつて、言論を以て時代を導いた、彼のごとき高士がかくも長き間新聞記者たりしを見れば、當時の新聞なるものは今日のそれほど低きものではなかつたのであらう、ウ・ナシントン、リンカンを大統領に選んだ米國と、ローズベルトを大統領に仰いだ米國との間には、大なる徑庭があるものと見ねばならぬ。

新聞記者たる間にも、時々詩作をなし詩集を出版して、詩人として第一流の名聲を馳するに至つた。

南北戦争は終つた、彼は七十歳となつた、彼の誕生を祝ふために大會合はセンチュリー俱樂部に開かれて、米國第一流の人士が演説をなし詩を朗讀した、詩人ローエルも亦、

山々の聲も彼に順ひ

急流も彼の歌に動きぬ。

彼は見えざる者に對する信仰を歌ひぬ。

自重と名節と愛國心は彼の歌に溢る。

と歌つて、老詩人を稱揚した。

千八百六十六年妻死して、彼は孤獨を慰むるために、海外漫遊に出かけ、其間にホーマーの翻譯の續きを急ぎ完成せんと毎日四十行づつを譯し遂に六年の苦心の後、希臘詩人の不朽の名作は英詩となつて世に表はれた。

八十歳の誕辰は銀の鉢を以て祝はれた。

八十四歳に達して尙元氣は衰へぬ、彼は、五月二十九日、伊太利革命の精神的首領マヂニの銅像除幕式に演説を依頼されて、稍々不快なのを押して出席した、演説の初には元氣に乏しかつたが、伊太利の愛國者に對する彼の衷心の畏敬は彼の熱情を煽つて、彼は思はずも熱誠をこめて演説した、式後友人に招かれて其家に至り戸口を入らんとして後に倒れ後頭部を撲つて腦振盪を起し、これが基因となつて遂に八十四歳の高齡を以て世を終ることゝなつた、時に千八百七十八年七月十二日である、遺骸は國民全體の哀悼の中に彼の特愛の地なりしロング島のロスリンに埋葬せられた、彼は曾て願つた通り、

To the calm world of sunshine, where no grief

Makes the heart heavy and the eyelids red.  
 悲哀が心を押し眼を曇らすことなき  
 静寂なる輝く世界にまで、  
 旅立つたのである。

人 物

ブライアントは活動と思索との両面を具へた人であつた。  
 法律家としても相當にやり、新聞記者としても最優者の一人であつた、屢々諸處に詩學に關する講演を試み、又演説家としても拙劣ではなかつた、幾度も歐洲を訪うて見學し羅馬にまで至つた、最期の年に於ても其精力は衰へず、其毎日の活動は壯年時代と少しも變らなかつた、新聞記者としては紙上に於て國民を指導することを怠ら

す、決闘の悪事なること、奴隷賣買の罪惡なること、労働者が組合を造る權利あること等は彼が大聲疾呼して世に教へた處であつた、米國の自由を益々大にして其天職を果さしめんとするのが、彼の愛國心であり又彼の操觚者としての事業であつた。  
 南北戦争の起るや、既に其前より奴隷制度を排撃し居りしブライアントは、文に詩に北部のために熱誠を注いで努めた、此點に於ては彼はガリソンやホヰッチャと共に其功を分つべき人である。  
 かゝる人であつた故、常に主義を抱く人 (principled man) で、右に就くか左に就くか判然して居つた、從て彼は天性激烈の所があつて、常は憤激を抑へて居たが、一生に唯一度抑へきれないで、一人の政敵を殴りつけたことがある、實に彼は曾て彼の歌つた通り「真理のため

に戦つて、死に至て初て戦をやめた人である。

しかし活動性の裏面に沈思性があつた、波濤の下に静水が湛へられて居た、彼が二十二歳の時辯護士の資格を得た後、直ちに爲した事は事務所の開始ではなくて天然の研究であつた、其年の十二月にはブレインフィールドといふ一小村に引込んで、八ヶ月間天然を友として暮した、名作水鳥に與ふは此村に初めて到着した夜の自分の孤獨の感を鳥に寄せたものである、ニューヨーク在住時代にも都會生活を厭うて居た、千八百三十六年新聞事業を罷めて西方へ移住しようと思つたことがある、其時兄弟に送つた手紙に曰ふ。

：市民は儲金の外は何事をも思はず語らず候、市は益々不潔喧騒を増し申候、生は最早都會生活に厭き、致し地方に暫く暮し度く有之候、生は長らく一日刊新聞の編輯に従ひ居り候へば、此一閑暇の身となりて好き、文學にたづさはり度く思ひ居り候。

其後彼はロング島のロスリンに別宅を構へて、屢々此所に退いて逍遙し、沈思し、詩作し、五十歳以後より死するまで、旅行せぬ時は、毎週二三日を此地に費した、天然に關する詩の多いのは彼の一特色である。

或人は彼の人物について云ふた、「彼は模範的のローマ市民とも云ふべき人であつた、彼の犯すべからざる威嚴と崇高き嚴肅とは、ローマの元老院議員として最も適當なものであつたらう、彼の人格は高くして近より難きものがあつた、彼は愛すべき人ではないが、彼ほど稱讃され尊敬された人は少い」と。

詩 風

彼の詩は彼の人格のやうである、やゝ古雅な所があつて整齊と品位

とをその特色とする、The Wordsworth of America (米國のウナルツラス)と  
呼ばるゝが、ウナルツラスの詩ほど深く人を牽く力はない、されど  
ウナルツラスに勝るも劣らざる品位と、そしてウナルツラスにはな  
い一種嚴肅沈鬱の調子が人を森然とせしめねばやまぬ、彼は英國な  
ごに於てはロングフェロー、ローエル、ホヰッチャほごには聞えぬ  
といふことであるが、「米國詩壇の父」たるにふさはしき程の重味を豊  
かに有することを我等は認める。

叙事詩

ブライアントの叙事詩は數少く、又彼が力をこめて作つたものとも  
思へぬが、其可憐な物語も全く無意味のものでなく、全體の精神か  
ら見るも處々の名句から見るも貴むべきものと云はねばならぬ、其

多くは米國土人の間の古傳を詩にしたもので、米人の輕蔑し驅逐す  
る土人の間にも人間らしいやさしい分子のあることを示したもので  
ある、思ふに土人も亦白人同様人間であるといふ意を傳へて人類一  
如の理想を説いたものであらう。

白足の鹿 (The White-footed Deer) は動物に對する米國土人の強き愛着心  
を描いたものである。

土人の娘の哀哭 (The Indian Girl's Lament) は戰場に斃れた壯夫に對する  
女の哀哭を詠つたもので、土人にも亦愛情、悲愁、未來觀等のある  
ことを示して居る、娘の哀哭に曰ふ。

墓界の長き旅を終へて、  
汝は終に光明の郷に、  
輝きて芳しき空氣の中に、

善人、勇者の靈と交る、  
今ぞ汝は幸福なる。

記念碑の山(Monument Mountain)といふのは、土人の間の悲しき愛を詠  
つた詩である、土人の或娘が從兄を懐ふ身となつたが、種族の間の  
習慣上從兄妹同志の婚姻を禁じてあるため、遂に或日一人の親友と  
共に山に登り、父の曾て調へてくれた凡ての裝飾を身に着けて終日  
二人で歌ひ暮し、髪には咲き亂れたる花をかざし、夕方友を歸らし  
て自分は斷崖を飛び下りて死んでしまつた、彼女はかくして煩勞多  
き此世を去つて、

悲哀が心を壓し眼をくもらすことなき  
静肅なる輝く世界にまで

行くこと、信じたのであつた、土人は後此場所に記念の標を建てた、

そして今尙ほ記念碑の山と呼ぶ。

此詩は土人の優しさとその未來觀念を示すと同時に、「美しき死」といふ  
ことを暗示したもので、西行の、

ねがはくは花の下にて春死なん

そのきさらぎの望月のころ

といふ歌と其精神に於て等しく、何れも「死の美」を形に托して説いた  
ものと自分は思ふ。

### 自由の詩

ブライアントの自由(liberty)に關する詩を少しく紹介して其思想を窺  
つて見たい。

井ルヤム・テル(William Tell)と題する十四行詩は、名の通り瑞西の愛國

者を讚美したものである。

鐵鎖は弱き男子を屈せんも

鐵鷹の爾ヲルを伏する能はず、

爾は山地の人なればなり、

山は永久の自由を説いてやまず。

千古の雪は自由を語り

冬を來らす神力の外

止むるものなき激流は自由を轟かし

天來颯々の風は自由を傳ふ。

爾は暗き獄舎にありて

自然の教へし教訓を沈思ひぬ、

短き幽囚の夢に

自由國スヰッツァーランドの幻は浮びぬ。

苦き杯は爾を強めぬ

祖國自由の大業のために。

山地の産なる自由を讚美した詩人は、之が完全なる實現を北米の新

世界に求めたのである、彼が十四世紀の瑞西を歌うた心は十九世紀

の亞米利加を勵ます心である。

お、大種族の母よ (Oh, Mother of a Mighty Race) は、彼が米國に對する希

望を述べたものである、大種族は米人を指したもので、母といふの

は米國のことであらう、其大意はかうである。

お、大種族の母よ、汝は若々しく、頬は輝き、歩みは疾し、眼に

は希望溢る、汝の姉等(舊世界の諸國)は汝を憎まんも、汝は子等(米

人)と共に安らかに住む、汝の中にては信仰は保たれ、眞理は貴は

れ、人は愛せられ、神は畏れらる、汝の中には自由宿り、弱き者、逐はれし者、壓せられし者は、皆汝の中に隠家を求む、若き母よ、汝の額はますます優に、汝の眼はますます輝き、汝の姿は高く聳えん。

預言者イザヤが理想國を仰望せしと同じ精神が、此新世界の詩人を動かして此歌を詠はしめたのである、そしてかくの如き希望を自國に繋いで居た愛國的詩人が、南北戦争の破裂に際し北部のために歌つたのは當然である。

我國の招呼(Our Country's Call)に於ては、彼は、

斧を棄て鋸を擲ち  
鋤を其場に遺せよ、  
銃と劍とは

今や卿等の腕にふさはし、

と説き起し、

権力と正義とが手に手を取つて動く

に至るまで戦へと結んである、彼も亦正義の完全に行はるゝ國を地上に期待したものと見える。

奴隸制度の終止(The Death of Slavery)は南北戦争終結後の作にして、感謝の國民歌と呼ばれたのである。

リンカンの死(The Death of Lincoln)は哀悼の曲にして、最後に曰ふ、

汝の生涯は潔かりき、

其悲惨の終焉は汝を光明の子の中に置く、

正義のために死せし人々の

貴き群に汝を列らしむ。



彼は熱血の湧くまゝに戦争歌を歌つたものゝ、其純なる思想に於ては平和主義であつた、彼は一刻も早く戦の終ることを希望し、戦争後にも、

おゝ関の聲の再び聞えざるを願ふ、

と歌つて居る、此點を明かにするために、「自由の詩」といふ題下にては少し不適當ながら、次に二個の詩を紹介する。

農業の歌 (Ode for an Agricultural Celebration) は戦よりも農業を重んずる思想を歌つたものである、先づ、

昔は農業が何よりも貴まれたのを、其後奪掠者が此世界を養ふ労働を蔑視して血を以て土地を汚した、今は人類は此流血てふ過去の罪を悔ゆるのである、

と説き、次に曰ふ。

戦は其華觀を失はん、

勇士の好む英名

激闘にて得し榮光は

消え、衰へ、終に亡びん。

全世界に、

永久に、

收穫を起し民を養ふ技術に

榮譽は加へられん。

戦場 (The Battle-field) は先づ、

戦争に出でたる者は今戦後にて休息に入るけれども、汝(なん)假定の一預言者を指すは世に今容れられぬ真理のためにより難き戦をなすもの、汝の戦は一生續く、辛勞慘苦の幾年を送り汝は孤獨の戦を

なす、されど世の嘲笑と猛撃に屈する勿れ、終に勝利は汝に来る、と云ふ意味を歌つて、結尾に曰ふ。

眞理は、地に碎かるゝも、再び起たん、

神の永世は夫れの屬なり。

されど謬想は傷けられて苦みもがき

其崇拜者の間に死す。

汝の味方は恐れて逃れ

汝は地に塗るゝの人となるも、

此戦の死者のごとく (此戦は南北戦争を指す)

希望と信頼に充ちて死せ。

他の手代つて汝の剣を取り、

他の手代つて汝の旗を振らん、

かくて眞理は終に勝を得て

勝利の譜は汝の墓に奏せられん。

ブライアントが「流血の戦」よりも、「鋤の戦」を重んじ、「眞理のための孤

園」を讚美せしことは忘れてはならぬ。

由來亞米利加の詩人には自由に關する詩が多い、自由を讚美するこ

とは彼等の著しき特徴である、勿論、信仰の自由のために本國を逃

れ來つた清教徒の植ゑた國で、又政治的自由のために弱力を以て故

國に抗した獨立の先祖等の建てた國である故、此事あるは當然であ

らう、しかし彼等詩人は唯自由々々(空騒をした)のではない、彼等

は米國を以て其あらゆる意味に於ての自由を實現しつゝ進む天職を

有するものと信じた故に、其自由を叫ぶ時には、米國の使命と世界進歩の歸向を思考の中に入れて居つたのである、彼等が南北戦争の時北部のために盡したのは、奴隷を感む心の外に、米國をして其使命を果さしめんとの希望があつたからである、即ち彼等は全人類を包む廣い自由を思つたのである、そして又何よりも平和を貴んだのは彼等詩人の特徴である。

天然の詩

ブライアントの詩の重なる主題は二つある、其一は天然、其二は人生(重に死)である。先づ天然に關する詩を見るに、ウァルヅラスの如き詩想豊かに真情流露する天才の作と比肩することは出来ぬもの、誦者をして深き沈想に入らしむる彼の眞率は他に比類を見難きものである。

である。

彼は如何やうに天然を讚美したのであらうか。

一 森林の入口に刻す (Inscription for the Entrance to a Wood) は、

旅人よ、汝もし

世の罪業惨苦に充つるを知り、

その悲哀、積罪、煩勞多きを看て

心鬱する所あらば、

この林に入りて天然の領を睥よ、

静けき木蔭は静寂を供し、

緑葉を躍らす快き微風は

汝が傷める心に安慰を送らん。

汝を苦しめ、汝をして

生を厭ふに至らしめし  
人界紛々の事は此處に無し。

と説き起して、進んで大様次のごとく歌ふ。  
この蔭濃き地は尙ほ歡喜の住む所である、緑の枝は屋根をなして、自由に歌ひ快活に躍り廻る鳥と相呼應し、下には栗鼠が愉快さうに饒舌る、昆蟲は日光の中に舞踏する、翠の樹々も深き満足を感ずるが如く軟風に戦ぎ、日光は青き空より來つて此ところを祝福する……小川は愉快な音を發し、小石にあたり岩を越え、絶えず笑ひ續けて自己の生存を喜ぶが如くである、流れを弄ぶ軟風は汝(旅人を云ふ)に來りて汝を軽く抱くであらう。  
實に歡喜的天然觀とはこの事であらう、彼と等しく米國に生れて等しく天然を讚美したトローは曰ふて居る、『自分は毎日少くとも四時

間は山林の中を逍遙する、かの終日家に閉ぢ籠つて居る近世の文明人は、よく病氣にならぬものだ……林中深くわけ入つて後、願みて市街を見ると星の如く小さく見ゆる、實に文明世界といふ人間の領分は天然世界に比すれば比較にならぬ程小さい處だ、其小さい場所政治とか工藝とか文學とか宗教とか云ふ物共がわい／＼騒いで居るのである』と、彼は又曰ふた『人間の世界に這入ると私は私をつまらぬ人間としか思へない、天然世界に入つて初めて自己を見出す』と、二人は同じ事を、一人は詩を以て歌ひ一人は散文を以て述べて居るのである、我等は社會の壓力に押し倒されぬやう屢々天然を探つて、入の手に造られざる天性のまゝの山川草木に天然の神に近く接せねばならぬ、人間の造つた社會は最も天國に遠いものであることを忘れてはならぬ。

森林を讚美する歌(A Forest Hymn)も天然歌である、先づ説く。

森林は人類最初の神殿であつて、人が大なる會堂などを造つて讚美歌の合唱を反響させて嬉しがる前には、森の中で神を發見し、森の中で跪いて祈つたものである、其森嚴な天然に觸れて祈らざらんと欲するも得なかつたのである、然るに今日此聖き場所を棄て、人間の手で造つた屋根の下で、群衆の中に騒然として神に祈るとは何たることであるか。  
かくて彼は歌ふ。

父よ、爾が手此森を造りしなり。

.....  
これぞ謙遜なる禮拜者が  
其造物主と交るための好拜殿なれ、

人間の華美と驕傲を傳ふる

堂屋の壯麗は此所になく、

爾の所造を汚す人類の浮誇を

表する空幻の彫刻は此所になし。

爾は此所に住む、此靜處に住む。

爾は樂を奏しつゝ、樹々の頂を走る

軟風の中に住む、

爾は此の奥深くより來る

涼しき微風の中に住む。

.....  
爾は林中に

爾の完全を證するものを殘せり、

莊美と強健と優雅とは  
此所にありて爾を傳ふ。

尙ほ彼は進んで次のやうな意味のことを歌つて居る。

余は、沈黙の中に我周囲に行はるゝ大奇跡を思ふて畏怖する、大奇跡とは永久の事業なる神の創造そのものであつて、出来上りては居れど永遠に改めらるゝものである、神が所造の上に彼の永久性は明かに表れて居る。

林中に深く隠れて思念と祈禱に一生を送つた聖者もあれば、かゝる隠遁生活を批難した聖者もある、とにかく余は屢々此閑處を訪づれて神の前に余が徳性の回復を計り度い。

かくて最後に歌ふ。

我等この静けき蔭に

爾の平和、莊嚴を沈思し、

爾の天然の整齊に則りて

我等の生涯を送らんと願ふ。

まことに大にして深き天然の讃歌である。

樹々の間にて (Among the Trees) も右に同じやうな詩である、唯其最後に

に將來の平和を歌ふ。

もつと立派な時代が来るであらう、其時には善と惡の長き戦終りて神の力世を治め、國々の王は民の鋤を奪ひて殺人の術を教ふるために召集することなく、其時には今日勢威を擅にする暴力は大法の静かなる叱斥の下に倒れ、其同類なる譎詐も耻ぢて退くであらう。

彼は天然の詠歎にことよせて自己の大希望の一端を洩らしたのであ

る。

お、美しき田舎娘よ (Oh Fairest of the Rural Maids) は田園の自由なる生活を歎美した詩である。

汝は蔭深き森林に生れ

.....

幼時の嬉戯の行遊は

常に林中にてなされたり、

森地の美は悉く

汝の心情と顔容に宿る。

.....

汝の歩行は風の如し、

樹の間に戯る、風の如し。

.....  
人跡至らぬ森の奥所も

汝の胸のごとく聖からず、

此静寂の空気を充たす

聖なる平和は汝が胸にあり。

彼はかくのごとく田園と田園に育つ人を讃美したのである。

小川 (The Rivulet) は、人生の移り易く現世の無常なるにくらべて天然

の恒久なるを讃美した詩で、ブライアントの特色たる悒鬱深沈の調

子が全篇に溢れて居る、此詩を誦しては誰人も沈思せざるを得ぬ。

秋の林 (Autumn Woods) も亦天然を讃美したものであつて、其最後に曰

ふ。

人を狂はす浮薄、低劣、奮争を棄て、

富貴權勢を得んどの力争を棄て、  
人生を枯らし短き生を徒らにする  
盲慾と心勞を棄て、

どこしへに汝(林)の中にさまよひ、  
柔き西南風に撫でられつ、

いつまでも彷徨し夢想せんは、

あゝ世にも有り難き幸運にぞある。

彼はかく人生の紛争を厭ひ、かく森林の彷徨を愛した、これ必ずしも厭世主義ではない、世に生活して世に吞まれざらんがためには、我等は森林の奥に聖なる姿を拜さねばならぬ。

プライアントは天然を其凡ての形に於て讚美した、彼の天然歌には右に掲げし外三月 (March) 夏の風 (Summer Wind) 西風 (West Wind) 新月

(New Moon) 雲 (Cloud) 星 (Stars) 秋の聲 (The Voice of Autumn) 黄色のすみ

丸草 (The Yellow Violet) 北極星の讃歌 (Hymn to the North Star) 川の夜旅 (The

Night Journey of a River) 等數へ盡せぬ程澤山ある、彼は尙颶風 (Hurricane)

を讚美し、進んで蚊に與ふる歌 (To a Mosquito) までも作つて此萬人に

嫌はれる小動物のために同情愛憐の曲を奏でた。彼にとりては天然

物は如何なるものでも神の形像であつた、それ故彼は萬物に意義と

歡喜とを見出してそれを歌ひ出さんとした、彼は漫然として天然の

美を歌つたのではない、無意味に人を天然まで連れ行くのではない、

必ず天然物に含まれたる或真理の處まで人を導いてゆく、從て彼の

詩に華かな處はない、いつも眞面目である、いつも深沈である、さ

うして色々の眞理を我等に與へるのである。

天然を愛して文明世界を嫌つた彼も、あまりに地上の美を歌ふのあ



まり時として人間の世界をも讚美した、たとへば、  
市を讚美する歌 (Hymn of the City) に於ては大様次のごとく歌ふ。

我等は山や野のみで神と交るのではない、群衆の中に於て、此喧  
騒なる市街に於ても、全能の御手がある、日光も家を照らすし青  
き大空も見える、皆神の賜物である、神靈は至る所に充ちて迷へ  
る衆生に悔改を促して居る、夜が来て大市街が寂として休んで居  
る時、之を護るものは神である。

市街は人類が誇榮の所産であるかも知れぬ、しかし大能者は之れを  
も護り給ふといふことを歌つたのである。又、

小道 (The Path) は小山の側に造つた小道の開通を感謝した詩である。

廣漠たる森の中で迷つた旅人が小道に出逢へば、雀躍して心も輕  
くなり、同胞のなつかしい足跡にキスし、神に感謝する、そして

人間の住む場處の近いことを知つて恐怖なくして歩み出す。

なご、様々に道路の有難味を説いて最後に曰ふ。

小道が大道に合し、大道が地上を通つて山に上り谷を通り、延び  
て、東洋と西洋とを結び太平洋と大西洋とを連れ、遂に世界人類は  
一國となりて相親しむことであらう、されば交通といふことは有  
難き人類の本能である、之のために人類がだん／＼親んで來るの  
である、かの海に戦艦を浮べて交通を妨げんとし山に砲壘を築い  
て他の入來を阻むが如き者共は、悪虐の手を以て汝神の聖業を破  
らんとするものである。

彼はかく交通をも讚美して世界平和、人類一如の將來を待望したの  
である、そして彼が非戰を主義としたことは此詩により又前掲の樹  
樹の間にてによつて明かである。

詩人が天然物にことよせて自己の宗教的信仰をあらはした詩に尙ほ  
 龍膽に寄す (To the Fringed Gentian) 水鳥に寄す (To a Waterfowl) の二がある、  
 彼が短詩の双璧とも云ふべき立派なものであるが後者の方だけ紹介  
 する、第四節より譯すると、

彼の道なき水際に沿ひ

荒漠無限の空を通じて

汝を(水鳥)導く一の力あり、

汝はひとり彷徨ひて、しかも迷はず。

天の高處、冷き上空を目指して

汝は終日舞ひ上れり、

暗き夜は近よるとも

憶れて地に下ること勿れ。

間もなく汝の辛勞は終り、

汝は涼しき住家を得、

友と息み且歌はん、

草は曲りて汝の巢を蔽はん。

あゝ汝は去れり、

青空は汝の姿を呑めり、

されど汝の與へし教訓は

我心情に深く入りて去らじ。

帯より帯、極より極に、  
 無涯の空を通じて確實に汝を導く者は、  
 我がひとり歩む長途にても  
 正しく我足を導き給はん。

もし龍膽に寄する詩が希望の死を歌つたものとすれば、これは希望の生を歌つたものである、共に宗教的信頼の詩として上乘なるものであらう、我等も亦人生の方向に迷ひし時にブライアントを慰めた水鳥を思つて、孤獨數十年の戦をなす覺悟を有さねばならぬ、水鳥は神の指導と自己の羽翼との外頼む處はなかつた、我等も亦金錢や權勢や衆愚などの力に頼つて水鳥に劣るの譏を受けてはならぬ。

人生の詩

勝利者の墓 (The Conqueror's Grave) は人生の眞の勝利者は誰であるかといふ問題に極めて明かに答へたものである。

此小やかな墓の下に一人の勝利者眠る、人の知らぬつまらぬ墓で碑の表面には唯の名が記されてあるのみである。此中の人は鐵身血腕地を奪ひ敵を褶伏するを事とした人ではない、否、やさしい人で、心も容も穏かで、親切の微笑は顔に溢るれど、一度他人の苦を聞いては顔を曇らす人であつた。

彼女墓の主は婦人であるの事は獨りにてなされ、戦は孤高の戦であつた、其長き戦の間彼女は神のみに希望を置いて他の助けを願はなかつた。彼女は悲哀と戦ひ苦痛と戦ひ、失望を覺し、主の名に於て愛を以て憎惡を逐ひ、善を以て惡を滅ぼした。時に日は低く西に傾きぬ、

冷き空気が夜の近きを告げぬ、  
 お、静かなる眠れる人よ、汝の墓を、  
 我は悲しき中にも慰められ、  
 希望の中に恐怖もありて去らんとす、  
 我は知る、時は短かし、  
 而も戦は始まりし所なり、  
 されど汝の得し勝利は誰人も得るを得ん、  
 汝を養ひし源流は今も流るゝなり。  
 然り、我等は此源流に養はれて此勝利者の一人とならねばならぬ、  
 外に戦はずして衷に戦ふことが真正の戦であり、そして此戦に勝つ  
 てこそ真正の勝利であることを充分に知るべきである。  
 神の愛 (The Love of God) は曰ふ。

地上の萬物は皆過ぎ逝らん、  
 唯神の愛のみ永久に活く、  
 .....  
 國々は皆失せ  
 支配者も死に屈まん、  
 地球も亦高熱に溶け崩れん、  
 萬事萬物皆去らん、  
 唯神の愛のみ永久に活く。  
 神の愛は盡くることなし、そして此事さへ益々明かにわかれば、他  
 の事は凡て消え去つてもかまはない、此世がどうであらうが、遂に  
 亡びようが、神の恩恵のみ失せずば我等は巖の上に立つが如く安心  
 である云ふ意味であらう、丁度哥林多前書十三章八節以下にある

使徒パウロの愛の賞讃と相照應する言辭である。  
ブライアントの詩には「人生の無常」といふ情緒のたゞよつて居ることが多い、彼は人生世相の眞を見て、先づ深く時の過ぎ易きと生の移り易きとを感じた。

春の日は琥珀の光を放ち (The May Sun sheds an Amber Light) は、千八百四十七年彼五十四歳の時齢老いし母を失ひて後其墓畔に哭せし詩である、實に美しく又悲しき短詩である、彼は飽くまで人生の悲曲に泣いた詩人である。(此詩は内村鑑三氏著「愛吟」にあり)

老人の忠言 (The Old Man's Counsel) の大意はかうである。  
時は五月にして野は輝き花は咲き鳥は歌ひ、自分は天然の美に包まれて愉快でたまらぬ、處が伴侶の老人は悲しさうな顔をして居る、自分は何故と尋ねた。

老人は答へた、「君の喜ぶのは齡が若いからだ、併しいまに段々衰へるとさうは行かぬ、小供の時は時間が静かに過ぐる、晝間が長い、壯年となつては時はもつと早く過ぎる、老人になると時は舞つて行く、私は急流を下る舟に乗つて居るやうなもので、もう最期の時は近い。」

老人はかく人生の無常を歎じた後、  
『それ故若い間に早く美德を得、純潔な思想を得、神と人とに對する愛敬を學べ、さらば年老いても心思衰へ心情さびれることはない』と忠告した、實に忘れがたき忠言であつた。

併しブライアントは唯人生の悲哀をのみ歌はない、彼は好んで死を歌つたけれども絶望的の死を歌つたことはない、悲哀に始まつて歡喜に終り、失望に始まつて希望に終るのが彼の人生に關する詩の著

しき特色である、彼は夜を歌ふけれど曙を共に歌つた、暗の次に光の來ることを歌つた、一言にして云へば彼は「無常的希望觀」を抱いて居た、眞に希望の貴さを知るがためには、先づ深く生の無常を知らねばならぬと考へた。

老人の葬式 (The Old Man's Funeral) は死を讚美した詩である、或老人の死床に歎く人々に他の一老人はかう云つた。

我等の老友死ねりて何の涙ぞ、

汝等は刈られし穀粒を見て泣かず、

採られし豊熟の果實を見て泣かず、

伐られし大木を見て泣かず。

風静まれる爽けき夕、

日輪は空と地を照らしつゝ、

其大なる行路を終へ、

休息の地に沈み行き、

別離の微笑を放つて残光天と山を

赤く染むる時、汝等歎かず。

さらば汝等何とて彼のために泣くや、

彼は遂に命數をつくし、

人生の恩寵を受け、人生の勞働を終り、

静かに休息の地に入りしなり、

かくて落日の後の残紅のごとく、

彼が美德は人の記憶に残れり。

彼が少時は純潔なりき、  
長じては毎日善事を爲し、  
老いては愛する者に囲まれつゝ、  
静かに其晩年は過ぎ行けり、  
かくて安んじて其命を卒はり、  
良き生涯の結果なる聖き休安に入れり。

彼は生を樂めり、日々彼は  
其樂しき生活を感謝せり、  
病想は彼を囚ふる能はず  
欺く能はざりき、  
奢侈と怠慢の病魔を誘ふなく

老年にして彼の四肢は健なりき。

かくのごとき善良強健なる生を送り得るものを、唯徒らに死を悲む  
は愚である、日々善をなすことを心掛けつゝ生を樂みて感謝の中に  
日を送り月を過ぎすことこそ我等の願である、神の造り給ひし宇宙  
にありては萬事を其光明の側に於て見るべきである、我等は人生の  
良き面を見て之を樂しみ、病想 (sick fancy) の囚ふる處となつて暗黒  
のみを好むものとなりたくないものである。  
死觀 (Thanatopsis) は彼の傑作として有名なものである、しかし二十歳  
未滿の時の作である故、後年の詩に見ゆるやうな深き思想と高き希  
望とは缺けて居るやうに思ふ、さりながら少年にして早く既に「死」に  
ついて深く思ふといふのは、彼の思想が一生の間如何に強く死とか  
來世とか云ふ方面に向つて居つたかを示すものである。

汝は唯一人で墓に下るのではない、そこには古からの王、賢者、善人、預言者など皆同居して居る。そして山や谷や川が墓地の傍にあつて皆墓地を飾り、又太陽も天の諸星も其處を照らす。地に生ける人は墓に眠る人の極小部分である、汝が唯一人で死ぬのではない、人は一人残らず死ぬのである、老人も少年も壯婦も少女も皆汝の側へ行くのである。

といふ意味のことを歌つた後最後に曰ふ。

汝は奴隷のごとく鞭うたれて

牢舎に入れらるゝにあらず、

確實なる手にて支えられ慰められて

汝の墓に近づくなり、

恰も寢臺に横はりて

樂しき夢を見んと眠る人の如し。

「確實なる手」といふのはテニソンの辭世の詩によれば「水先案内」である、明瞭な語にて云へばイエスキリストである、之に信頼して安んじて死ぬのである、又死者を「眠る人」に譬へたのを見れば又覺むる時を豫想したに相違ない、即ち復活の希望を我詩人は抱いて居た。

二墓の墓 (The Two Graves) は明かに復活の希望を歌つたものである。

彼等は且つ祈り且つ俟つて此邊を去らず

彼等の肉體が地を離れて出で來るまで。

といふ此詩の結尾は以て彼の抱いた希望を知るに足るものである。

死を讚美する歌 (Hymn to Death) は二百行に亘る死を讚する詩である、

處々の意味を述べよう。

人は汝死を恐怖の王「世界の破壊者」として呪ふが、余は死を讚美す



る、汝を呪ふ者は生きて居る人々である、汝を味はず汝を能く知らぬ人々である、罪を澤山重ねて恐怖に堪えぬ人々である、けれども善人は重荷を去る者、平和を興へる者として汝を喜ぶのである。汝は救出者である、弱者を解放し、壓制者を碎かんために神の下し給ふ者である、汝は傲慢にして己れを全能者と等しくする此世の英雄を一撃の下に斃し、暴王の命を奪つて地を再び民に與へる、凡て驕る者、傲ぶる者、己れに恃む者、弱者を壓する者、神法を蔑視する者は、汝の捕へる處となりては無に歸してしまふ。かくのごとく死を讚美して、終りに死者に對して次のごとく曰ふ。

されば汝、神の胸に息め、  
短かき睡眠終りて  
遂に塵より起ちて

恵まるゝ新生に至るまで。  
其復活の希望を傳へるものなることは明かである。  
愛の埋葬 (The Burial of Love) の最後に曰ふ。

今我等が地中に埋めたる人は  
後再び生きん、  
光の體、崇高き容姿、清き姿にて  
此土塊を破りて出で、  
高く、神の右の手に近く、  
永久の榮光の中に立たん。

過去 (The Past) は妹の死せし時に歌つた詩である、其大意に曰ふ。

汝過去よ、汝の中には人に知られぬ美事善行が隠れて居る、世に發表されぬ慈善や確固不拔の信仰なども隠れて居る、悲哀の中に

起つて死の中にたぢろがぬ愛も亦汝の中にある、凡そ善なること  
凡そ美なることが凡て汝の中に隠れ去つた。  
之等過去の中に没せし凡ては絶滅したのではない——

之等は決して滅せしにあらす、  
深切なる語、美しかりし彼の聲、  
嘗て輝きし彼の微笑、  
及び大精神を宿せる顔容——

凡てが再び表はるゝなり、  
愛の絆は再び結ばるゝなり、  
唯悪のみ亡び  
悲哀のみ囚へられん。

復活と之れに伴ふ再會の希望である、眞に美しく又眞に人を慰むる  
希望を詩人は奏で出たのである、之を迷信とし空望として排する  
は随意である、しかし愛する失せし者を深く懐ふ誠實の人にして此  
希望によつて非常なる慰藉を受けしもの多きを見れば、我等は唯右  
を以て詩人に有りがちな空想と斷ずることは出来ぬ、もし神が宇宙  
を支配し宇宙が光明の所であることを信するならば、我等は詩人と  
等しき希望を抱いて差支ない筈である。

時の流れ(The Flood of Years)はブライアントが最後の詩であつて最もよ  
く彼が思想の特色を表すものである、先づ時は洪水のごとく萬事萬  
物を流し盡すといふ彼一流の無常觀を長く記した後、最後に失はれ  
し生の復活に説き及んで次のごとく曰ふ。

舊友は再び會し、

平民詩人終

たとへ難き喜悅を以て手は手に握られ、  
 母は其失ひし愛兒をひしと抱く、  
 舊き悲哀は今忘れらる、  
 或は記憶せらるゝも償はれて餘りあり、  
 傷み破れし心情は長へに醫やさる。  
 詩人時に八十餘歳、先ちし父母、兄弟、妻と會すべく洋々たる希望の風に乗つて彼方光明の郷國を望み、其希望を筆にして遺す、美なり、大なり。

大なる詩人の一生と其詩とを味はつて我等も人生について深く思ふ人とならねばならぬ。

製 複 許 不

刷 印 日 大 月 四 年 三 正 大  
行 發 日 九 月 四 年 三 正 大

著 作 者 内 村 鑑 三  
 著 作 者 吟 上 賢 造  
 發 行 者 東 京 市 京 橋 區 尾 張 町 二 丁 目 十 五 番 地 福 永 文 之 助  
 印 刷 者 橫 濱 市 太 田 町 五 丁 目 八 十 七 番 地 村 岡 平 吉  
 發 行 所 東 京 市 京 橋 區 尾 張 町 二 丁 目 十 五 番 地 警 醒 社 書 店  
 振 替 東 京 五 五 三 ( 電 新 一 五 八 七 )

錢 十 五 價 定



内村鑑三先生著書

興國史談	定價五十錢
地人論	定價四十錢
眞操路得記	定價十五錢
外國語の研究	定價廿五錢
内村先生講演集	定價五十錢
所感十年	甲種八十一錢 乙種六十錢
研究十年	甲種六十一錢 乙種五十錢

■ 畔上賢造先生譯書

ヘンリ・ドラモンド氏原著——再版——

■ 人間上進論

定價八十五錢

トマス・カーライル氏原著——上・中卷——

■ クロムエル

定價六十錢

内村鑑三先生著書

獨立短言 定價五十錢

よろづ短言 定價五十錢

警世雜著 定價四十錢

獨立清興 定價十五錢

余は如何にして基督信徒となりし乎 (英文) 上製定價五十圓 並製定價五十錢

代表的日本人 (英文) 上製定價五十圓 並製定價五十錢

内村鑑三先生著書

基督信徒の慰め 定價卅錢

宗教と文學 定價十六錢

傳道の精神 定價廿錢

求安錄 定價卅錢

後世への最大遺物 定價十五錢

宗教坐談 定價卅錢



5/

325  
216

終

